

田上山鎮寄寺

元・  
元・  
元・

中坂の上は伊香高校



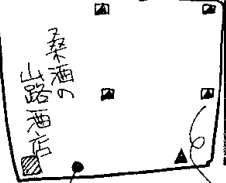
境内の一隅にのみ  
古一橋

意園布良神社



「売物件」の文字が...

浄信寺



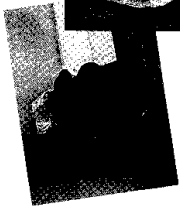
桑酒の  
山路酒店



寺領を示す石標  
四隅にあたり

元郡役所跡

おとひの来  
竟匠  
ハダラ



「馬車」が用いられた。  
昭和の時代

琴糸の丸三にモト



伊香町の土の海

トロク海



江北図書館



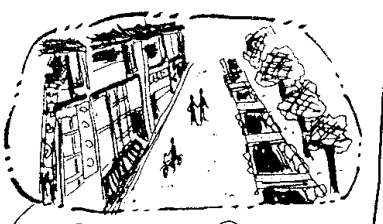
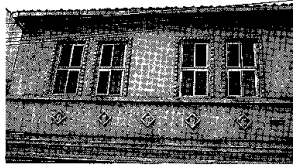
神領通  
石段下へ階段が... 地蔵坂と命名された。

JRきのもと

「木之本」の名の由来を  
象徴するような木の本。  
5年ほど前直る。  
二本とも青い色になる。



木之本  
木之本  
木之本



北国街  
北国街  
北国街

新しい道標

浄信寺  
浄信寺  
浄信寺

浄信寺  
浄信寺  
浄信寺

白木屋

~~~~~ 川が流れていた。 ~~~~~

北国街

浄信寺  
浄信寺  
浄信寺

浄信寺  
浄信寺  
浄信寺

浄信寺  
浄信寺  
浄信寺

浄信寺  
浄信寺  
浄信寺

浄信寺  
浄信寺  
浄信寺

浄信寺  
浄信寺  
浄信寺

浄信寺  
浄信寺  
浄信寺

浄信寺  
浄信寺  
浄信寺

浄信寺  
浄信寺  
浄信寺

浄信寺  
浄信寺  
浄信寺

浄信寺  
浄信寺  
浄信寺

浄信寺  
浄信寺  
浄信寺

浄信寺  
浄信寺  
浄信寺

# ぶらり道歩記

木之本町  
北国街  
地蔵坂あたり

地名のつく店名の中には、  
「大阪館(理容室)」も...  
★ → 呉服屋さんが多いのは、たしかの  
女工にお仕着せをつくら  
せられたからか...  
☒ → 醸造関係のお店も多い。

伝統芸能保存活動センター  
保健センター 木之本町役場  
スタックホール

R8

まおや書店



# 木之本一の黒田武士

「一とせ」。ト田の本い、ちのオ黒田節い、の、黒田武士のご先祖さまは、木之本町黒田に住んでた……。

## 官兵衛さんのことならこの人

「官兵衛さんの話を聞きたい。誰がいいだろう」と木之本の人に聞くと、「そりゃ、藤田さんに限る」と教えられて訪ねたのが、木之本町役場である。藤田さんは、ここの主、藤田市治町長のこと。

町長室の応接椅子にドツカと座って、あいさつもそこそこに、「官兵衛さんのことをお聞きしたくて伺いました。どうぞよろしく」といきなり切り出すと、「承知しました」と町長。噂にたがわず、淀みのない口調で、一大叙事詩を語るように「官兵衛物語」が始まった。

官兵衛とは、秀吉に、「ワシが死んだら天下を取る男」と言わしめた、黒田官兵衛如水のことである。彼が、無名の一武将から名をあげたのは、

長篠の合戦（一五七五年）であった。当時、天下第一の精強な軍団を擁していた武田氏が、織田軍に惨敗するだろうとは、誰も思わなかった。

それを、播州小寺家の家臣であった官兵衛は、家中をまとめて織田氏に帰服。織田軍大勝利により、黒田官兵衛の芽が初めて世に出たわけだ。木之本町黒田——。黒田家発祥の地である。集落の中心の公共広場は、古くから黒田屋敷跡と伝えられてきた所だ、かつては農協や小学校の用地として利用されてきた。遊園地を造るためにブルドーザーを入れたと、『黒田判官源宗満』と刻まれた石が出てきた。これこそ、黒田官兵衛、長政と、安土桃山時代を彩った武将の初代であった。以下、語り部を称する藤田町長の一席。

## 官兵衛は、黒田家九代目

「黒田家の遠祖は、宇多天皇の孫、雅信です。これが源姓を名乗って、宇多源氏と呼ばれました。雅信の孫、源成頼のとき、近江国蒲生郡佐々木の庄に移り住み、佐々木源氏と称しました。別に、近江源氏とも呼ばれています。」

近江源氏は、江南の六角氏、江北の京極氏と分かれ、京極氏の初代氏信の孫、源宗清、すなわち宗満が、伊香郡黒田村に住み、近在の領主として黒田判官と称したのが黒田氏の始まりです。官兵衛、つまり如水は、宗満から数えて九代目にあたります」

藤田町長が、これだけ黒田如水に入れ込むのも、郷土が生んだ英雄というだけでなく、町長自身、早稲田大学入学の折りの保証人が、黒田家

## 集落の中心にのこる屋敷跡

町長さんへの取材を終えて、黒田の集落へ向かった。道順は十分知っているつもりだったのに、袋小路に迷い込んでしまった。西黒田という集落だった。カンカン照りのなか、人っこひとりいない。ウロウロしていると、シユミーズ姿のおばさんが木陰で涼をとっていた。

「すみません、官兵衛さんの屋敷跡はどこですか」

と問うと、お歳の割には張りのある豊満な胸のおばさんは、小首を傾げた。私の声が聞こえたのか、隣家の開け放たれた窓から、もう一人のおばあさんが顔を

出して、「この道、まっすぐ行ってんなあ、集会所があるさかいんなあ、ほこらで聞いたらわかるわなあ」と、先ほどのおばあさんに同意を求めると、おばあさんはやっぱりまだ木陰に座って小首を傾げたままだった。



▼黒田の集落にのこる宗満の墓



に読める。御廟を守るようにして佇む木々から、まるでトタン屋根を叩きつける雨のような蟬の声が聞こえてきて、「夏」を一層著くさせた。

藤田町長に、「黒田家発祥の地」を核に、新たなまちづくりを考えては？と提案したが、ここが黒田の名を天下に知らしめた官兵衛生誕の地なら違ったものになっただろうが、もう一つインパクトがない。むしろ姫路や福岡の方がクローズアップされるのは仕方がないといったところ。

## 発祥の地をまちづくりに

所用があつて、再びここを訪れたのは十日後だった。その日は、風が涼気を含み、微かに秋をさへ感じさせた。先頃亡くなった司馬遼太郎氏も、明治維新で侯爵に列せられた黒田家の人々も、何度となくここを訪れている。

余談だが、長浜は、千利休、古田織部と並び称され、建築、造園、茶の分野で優れた才能を開花させた小堀遠州生誕の地であるのに、秀吉、三成ほど注目されてこなかったのは何故か。「綺麗さび」という独自の境地を切り開き、今日再評価の声が高まっているのに……。

話を戻そう。黒田家は、湖北の木之本で発祥し、戦国時代を生き抜くために流転を重ね、官兵衛の功績によって子孫はその地位を確かにし、明治維新まで続いた。維新政府から、大名華族として、公・侯・伯・子・男の爵位のなかでも数少ない侯爵に列せられたのだった。その後の黒田家をめぐる数々の挿話には、歴史に翻弄されていく悲喜こもごもの物語があるが、紙数がつきたので、このあたりで幕としよう。（姉川 渉）